

### 能楽の現在と未来 : いま考えてみたいこと

山中, 玲子

---

(出版者 / Publisher)

野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽の現在と未来 (能楽研究叢書 ; 5)

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2015-11

# 能楽の現在と未来—いま考えてみたいこと—

山中 玲子

本稿は、連続セミナー初日冒頭に山中がおこなった趣旨説明と問題提起、「能楽の現在と未来—いま考えてみたいこと—」を基に情報を追加し、再構成したものである。当日の「趣旨説明」の部分は本書の「巻頭言」にまとめがあるので、ここには「いま考えてみたいこと」の副題を付して羅列的におこなった「問題提起」を中心に記すことになる。当日の持ち時間は30分。「この場で何を考えたいのか」という問題意識を共有するいわば「予告編」のような役割の報告として位置づけていたため、「こういう問題がある」と挙げるだけで、それぞれについての意見・方策・解答などはこの段階では示していない。そうした内容は、3日間のインタビュー、報告、討議、講演等々の中に見いだされるはずである。

## I 新作能など

どこまでが「能楽」か、何があれば「能楽」なのか、という問題は、新作能や新作狂言の話とも深く関わってくる。現在、能の新作は非常に盛んにおこなわれている。筑摩書房の『能楽大事典』には「新作能一覧」として、単に書かれただけでなく実際に上演された新作能がリストアップされており、1887年から2005年まで、121曲が数えられるが、その内訳を見ると、1987年までの約100年間で56曲なのに対し、1990年～2015年の16年間で65曲も新作能が作られているのである。

こうした重要なテーマだけに、新作能については既に2004年7月、能楽研究所の第9回能楽セミナー「新作能を考える」でも様々な面から取り上げ

ており、その成果の一部は、自身〈草枕〉〈ジャンヌダルク〉等の新作能を書いた西野春雄により「新作能の百年」としてまとめられている（『能楽研究』29・30号）。従って、今回は「新作能」を正面から取り上げるのではなく、あくまで現代の能楽をとりまく様々な状況の一つとして触れることになる。以下の言及も網羅的であることをめざしてはいないこと、あらかじめお断りしておく。本書には2006年以降初演の新作能一覧（深澤希望作成）・新作狂言一覧（網本尚子作成）を収録しているので、個別の情報は両リストおよび前述の『能楽大事典』のリストを参照されたい。

2002年に小学館のShotor Libraryで、『能楽入門』のシリーズ3冊が刊行された。1冊目は「初めての能・狂言」、2冊目が「能の匠たち その技と名品」（能面、装束、楽器等とその制作者に注目）、そして3冊目は『梅若六郎能の新世紀 古典～新作まで』である。最も大きな活字で記されるメインタイトルは「能の新世紀」で、新作能の特集が中心となっているのだ。つまり能のガイドブック3冊のうち1冊が新作能を中心に編まれるほどいろいろな新作能が作られ、注目されているということである。

600年の伝統を通じてかっちりとした規範ができあがってしまっている古典の能作品と違い、新作能は現代演劇や現代音楽、あるいは西欧の古典音楽など、外の世界と繋がりやすいのだろう。特に能楽界の少し外側にいる観客に向けて能の存在をアピールする、重要な手立ての一つになっていると思われる。とはいえその注目は、能の世界の外から向けられるものであって、能の世界の中では新作能はやはりまだまだマイナーな存在であることは間違いない。そのような、伝統的な能の世界の中では二次的なものと扱われがちな新作能を日の当たる場所に位置づけるのに、梅若六郎（現・玄祥）の存在は大きかったと言えるだろう。

『能の新世紀』では、彼の関わった新作能、〈伽羅沙〉（1997）・〈空海〉（1998）・〈ジゼル〉（1999）などが大きく取り上げられている。〈伽羅沙〉ではパイプオルガンが、〈空海〉のときには声明が採り入れられた。それから

〈ジゼル〉はもちろんバレエの作品を素材にしている。旧来の能の枠組みを超える大胆な工夫や海外での公演が多いことが梅若玄祥の新作能の大きな特徴だろう。2006年には有名な長編漫画『ガラスの仮面』を基に、主人公たちが演じる芝居と同じ題名の新作能〈紅天女〉を上演。また2015年にはホメロスのオデュッセイアの一部を脚色した〈冥府行—ネキアー〉をギリシアのエピダウロスフェスティバルで上演するなど、従来の「能」の定義を超えていく活動が続いている。

2010年に観世鍔之丞がポーランドで舞った〈調律師—ショパンの能〉も、従来の能の枠組みにとらわれず、ショパンのピアノ曲が採り入れられていた。駐日ポーランド大使だったヤドヴィガ・M・ロドヴィツの書いた新作能である。新作能の作者は日本人だけではないし、また、素材も日本人にとって大切な人物、良く知られた物語にとどまる必要もない。能が世界の演劇であるならば、外国の人々の魂に触れるできごと、大切な物語や愛されてきた人物を主題にした能も作られて当然だし、そうであってこそ世界の演劇と言えるだろう。

現代社会の問題と深く関わる新作能の一群もある。脳死問題を扱う〈無明の井〉(1991)、あるいは朝鮮半島から強制的に連れてこられた人の〈望恨歌〉(1993)、水俣病をテーマにした〈不知火〉(2002)、原爆に関わる〈サダコー原爆の子〉(2002)・〈長崎の聖母〉(2005)等々、再演を重ねている曲が多い。テーマの深刻さを突きつけるだけでなくその先にある赦しや救済ということまで含めて、「能でこそ描きたい」という強い思いが作者にあるのも特徴である。

新作能への注目度を高めるのには、国立能楽堂の特別企画公演も大きな役割を果たしてきた。馬場あき子、瀬戸内寂聴といった著名人による台本作成で〈晶子みだれ髪〉(1995)・〈額田王〉(1997)・〈夢浮橋〉(2000)等、一般にもよく知られた題材を取り上げて話題を呼んだ。こちらは、国立能楽堂の舞台上で演ずるということもあり、梅若玄祥の新作能ほど大胆な(ある意味では能の定義を揺るがすような)冒険はしない。逆に、能という非常に形式の

整った安定した表現方法を活かしつつ素材の世界を広げる方向と言える。もちろん類型的な決まり事の中に当てはめて型どおりに作っていくというようなことではなく、新しい素材と出会うことで能の表現の可能性をさらに深めようという試みとも言うことができよう。

この他、梅原猛によるスーパー能〈世阿弥〉、岡本章演出の現代能〈始皇帝〉など、さらに新しい試みもおこなわれている。ちなみに、「現代能」「創作能」「スーパー能」等が「新作能」とどう違いどう定義されているのかは、実はハッキリしていない。上で見てきた如く能の枠を超えていくような新しい工夫が次々におこなわれた結果の呼称なのだろうが、いずれ、きちんとした定義が必要になってくるだろう。

以上、能の力を信じ、芸術性を追求し、能の表現の可能性を拡大していこうとする活動としての新作能について述べてきた。従来、新作能について語られるときにはその芸術性や旧来のレパートリーに敢えて付け加えるだけの意義があるかどうか問題にされてきた。だが、今回は少し別の方向をめざす新作能のことも考えてみたいと思う。

たとえば、観世喜正氏との対談の中ではモルトウイスキーのモルトを素材にした〈麦溜〉という新作能が話題になった。これは、「芸術的な深さを追求するのではなく、能のことを知らない人にもわかりやすい作品を」というのが目的で、観客層の拡大や、スポンサーの獲得といった、興行の面での工夫とも結びついた新作能である。当日昼休みにビデオを流していただいたが、見慣れた能の構造がうまく用いられており、無理のないわかりやすい作品と感じた。また、睡眠時無呼吸症候群のことを「オンディーヌの呪い」というそうで、その呼吸ができなくなってしまうこと、呼吸の問題に興味を持った生理学者が〈オンディーヌ〉(2007)という新作能をつくってもある。こちらは実見していないが、日本呼吸器学会の催しの一つとして演じられたようだ。

従来はこうした新作能制作を「安易」ととらえる傾向があったが、別の見方もできないだろうか。生理学者が良く知っている無呼吸症候群のことを、

またウイスキーの愛好者がモルトに関する知識を、能で表現したり能で確かめたりして楽しむことができれば、それがきっかけで能に親んでくれるようになるかもしれない。芸術性だけを追求していくうちに、現代の一般社会の生活とはあまりに離れてしまい、高級かも知れないけれどある意味やせ細ってしまった能を、もっと力強い、多少雑ばくでも多様性を確保したものにしていく努力の一つとして、このような新作能の意義を積極的に認めていくということもあって良いのではないだろうか。

さらに、最近の特徴として、地方自治体と協同し特に現地の子供を巻き込む形での新作能が増えていることも挙げておきたい。福岡市の〈桧原桜〉(2010)、大阪市八軒家浜で上演された〈水の輪〉(2009)などがそれである。まったく素人の子供たちをまとめて稽古して能の上演に集団で参加させるのだから、従来の価値観で見た場合は、芸術的に高い価値のある新作能にはならないだろう。だが、その作品が地域の財産となって毎年のように上演され、次々に子供たちが参加し謡や所作を覚え、「能をやった」という記憶と結びついていくというのは、〈井筒〉や〈八島〉ではなく、新作能だからできることだろう。能楽全体を大きくしていくための新作能の役割ということにも目を向ける必要があるのではないかと考えている。

どのような形にせよ、新作能や新作狂言の制作・上演には多くの協力者が必要になるが、もう少し簡単に能楽師個人に関われる活動として、他ジャンルとのコラボレーションも盛んである。ロック歌手と一緒に組む、バレエダンサーと一緒に舞う、クラシック音楽に合わせて舞う…等々、様々な試みがおこなわれている。能楽師の鍛錬された声を使って朗読をすることも、他人の朗読に合わせて舞うようなこともある。歌舞伎役者との共演、お笑いタレントとの共演、現代劇への出演などなど、現代の能楽師たちは、あらゆる人たちと多様な共演を試みている。少し前までは、能楽師の仕事(子弟の教育などは含まず、収入に繋がる仕事という意味)というのは「舞台に出ること」と「素人の稽古」と言われていたが、最近では、その二つに「さまざまな他ジャンルの人と組んでいろいろな芸術活動に参加すること」というのを

加えて三つにした方が良いのではないかと思うほど、あちこちで様々なコラボレーションが行われているのだ。当然、今回のセミナーの中でもそのような活動について、何度も言及されている。

## II 外国語による能・国際化の問題

今回のセミナーでは能楽界の「国際化」の問題についても考える。これだけグローバルな社会になったときに、本当に「外国人に能は演じられない」「稽古はしてもいいけれども、玄人として舞台上に立てない」というようなかたちで済んでいくのかという問題である。現代社会の状況に合わせ、能も広く門戸を開いて世界中から人を集め、オーディションで優秀な人材を確保するというやり方も、あるかもしれない。西欧のクラシック音楽やオペラ、あるいはミュージカルなどもこの形を取っていることが多い。逆に、能の伝統は非常に大切に、それは現代のグローバル社会でも絶対に変えてはならない、という考え方も当然あるだろう。「世界が亡びてもこれだけは…」というものを守っていくスタイルもあるはずである。

想像上のことだが、たとえば、ヒマラヤ山中の小さな村に残っている伝統的なお祭りや伝統的な芸能があったとして、これはどんなに社会が変わっても世界のどんな潮流にも影響されずに守っていくのだということに、大きな意義があるかもしれない。秘儀として秘境に伝わっていくかもしれない。能楽もそのような秘儀と同じようなかたちで、代々正しく伝われば良いのだろうか。それとも、世界中からいろいろな人が集まり、伝統とは関係なく、そのときに人気のある役者、実力のある役者が代わる代わる演じて行けばよいのだろうか。能はこれからどちらの方向にいくのだろうか。あるいは、そのどちらでもなく、第3の道があるのだろうか。そういうことも、これだけ世の中が変わってきた以上、考えてみる必要はあるだろう。

外国人のパフォーマーが能や狂言に関わる関わり方にはいろいろな形がある。まず、日本の能楽師が演じる能と同じ物を崩さずに学び、海外でも広げ

ようと活動しているグループとして、金剛流の宇高通成氏の指導する「国際能楽研究会」がある。彼らは日本語の謡を覚えて謡い、舞う。金剛流には、外国人の「師範」がいるのである。日本で演じられている伝統的な能の世界に飛び込んで学ぶ彼らの活動については、現在の中心メンバーの一人であるディエゴ・ペレッキア氏の報告を本書に収録している。

同じく正統の型をけっして崩さず、ただし言葉だけを外国語に変える、というやり方をしているのが、チェコの「なごみ狂言会」である。「なごみ狂言会」については、2012年の能楽研究所60周年記念シンポジウムに主宰者のヒブル・オンジェイ氏を招き、日本語で講演をお願いした。講演を元にした「心から心へ、翻訳で伝わる笑い—チェコにおける狂言の現状、過去14年をめぐって—」（日本語）を『能楽研究』38号に掲載しているので関心のある方は是非参照していただきたい。彼らはアルバイトをしてお金を貯め、狂言の装束や面の購入や制作の費用に宛てている。オンジェイ氏はもともと京都の茂山家で長期間修行をしたのだが、機会があれば「なごみ狂言会」のメンバーがそろって来日し、1カ月でも2カ月でも京都で一緒に稽古をするという形で高い水準を守り、今は〈口真似〉、〈附子〉、〈棒縛〉、〈梟〉、〈因幡堂〉、〈茸〉、〈呼声〉、〈佐渡狐〉、〈柑子〉の9曲をチェコ語に翻訳し、チェコ語で狂言を演じている。翻訳に際して、狂言独特のリズムを殺さないように様々な工夫がされていることは、オンジェイ氏の論考に詳しい。

山中は2014年1月にプラハで、「なごみ狂言会」によるチェコ語の狂言〈佐渡狐〉と〈柑子〉を観る機会を得た。〈柑子〉は能〈俊寛〉を踏まえており、そのままではチェコの人にはわからないのだが、オンジェイ氏がはじめに上手な解説をした上で演じているので、観客には大いに受けていた。こちらにはチェコ語は理解できないが、面白い動きのところだけで笑いが起こるのではなく、主人と太郎冠者のやりとりを聞いて言葉に反応して笑いが起こるのである。

余談だが、メンバーの友人が子供連れで観に来ていたらしく、上演後に感想のメールを送ってきた。子どもは〈佐渡狐〉より〈柑子〉のほうが面白

かったと言ったそうだ。小さな子供に〈柑子〉のどこが面白いのだろうと思ったのだが、「〈佐渡狐〉には悪い人が出てくるけれども、〈柑子〉にはだれも悪い人が出てこないから、〈柑子〉のほうがずっと面白かった」という感想だった。狂言の穏やかなあたたかな笑いが異国の子供にも（おそらくチェコ語で演じたことで）きちんと伝わったのだろう。

なごみ狂言会や国際能楽研究会とは違った形の活動もある。Theatre Nohgaku は英語能を演ずるグループで、現代的なストーリーを英語で能にし、英語で演じている。中心になっているリチャード・エマート氏の「能の音楽上の約束事を踏まえた上で書かれた英語は能となり得る」という主張が、多くの作品で実現されている。演じる作品は伝統的な日本語の能ではなく英語能であり、装束や面も能の約束事は踏まえながらも同じ物ではなく、独自の工夫がされている。しかし、メンバーは能の謡・舞、囃子、さらには装束付けまで、演能に必要な技法を真剣に身に付けており、この点は、国際能楽研究会やなごみ狂言会とも共通している。本書にはリチャード・エマート氏による英語能制作に関する論考と、2015年5月に東京で上演された *Blue Moon Over Memphis* に関するマイケル・ワトソン氏の論考を英文で収めてある。

能一曲を演ずるのではなくても、能に興味を持った外国のパフォーマーたちが、能の動き、能装束、能の音楽、といった一部を取り込んで様々な取り組みをしている。THEATRE of YUGEN は、サンフランシスコを拠点に活動しているグループである。彼らは、ネイティブ・アメリカンのヒーローの霊が現れる *Crazy Horse* (2000) のようなまったく新しい作品を演じるのだが、そこに能の囃子方が参加していたり、能の動きが採り入れられていたりする。新作能のところで紹介した〈無明の井〉も THEATRE of YUGEN のバージョン *Down the Dark Well* に変えてやっている。装束のつけ方も能とはまったく違う。音楽も、動きも違う。そのようなものを私たちはどこまで、これは能と認めるのか、ここはもう能ではないと思うのか、その区別が必要かどうかという問題も含めて考えていく必要があるだろう。

ちなみに、2006年3月、ドイツのトリア大学でNō Theatre Transversalという学会が開かれたとき、外国人研究者も含めて多くの参加者が、このTHEATRE of YUGENのパフォーマンスは「能」ではないと考えていた。もちろん「能ではない」というのは、ただ「能とは違うものだ」というだけのことで、そこに「能という名には値しない」というような価値判断は含めていない。能そのものではないけれども、「能的なものを取り入れた」あるいは「能にインスパイアされた」別の舞台芸術として捉えることができよう。新しいパフォーマンスに日本の能の一部（あるいはエッセンス）が影響を与えている例ということになる。このTHEATRE of YUGENの芸術監督に2014年、石田淡朗が就任した。和泉流狂言方石田幸雄の子として幼い頃から能や狂言の稽古を重ね、その後ロンドンで演劇の勉強をし、世界を舞台に活動する人物がTHEATRE of YUGENにかかわるようになったということの意味は大きいだろう。ここから何か新しいものが広がっていくのではないかと個人的には大いに期待している。

なお、セミナーの3日目に講演をお願いした細川俊夫氏のお仕事は演劇ではなく音楽の領域ではあるが、やはり能の音楽のエッセンスが西欧のオペラや音楽に刺激や影響を与えて新しいものを生み出していく例となるものととらえている。

### Ⅲ 能を取り巻く人々

能を取り巻く、能を支えている人々という問題も考えてみたい。能楽社会の中核に、能役者がいるのは言うまでもない。「命をかけてやっている」と言われる方も多い。何世代にもわたって芸を伝えている家もある。そこに制度として家元制度があり、中心（あるいは頂点）に宗家がいる、そのまわりに名家といわれるような家、あるいは、流儀により違いはあるが弟子を育てることができる家などがあり、またそのすぐそばに、そういう歴史や権限を持たないプロの能楽師がいる。その外にセミプロ（兼業）の人たちがいて、

その外に、プロやセミプロ以外の広義の素人がいる…というような、同心円（またはピラミッド）のようなものが描けるわけだが、このそれぞれのグループの割合や相互の関係は、時代とともに変わってきているし、いちばん外側の「素人」とどのような関係を構築していくのかということも、今後の能楽の発展にとって重要なテーマとなっていくだろう。

広義の「素人」の中には師匠について稽古をしている「素人弟子」（能の世界で「素人」と言えば普通はこの人たちのことだった。いわば狭義の「素人」）もいれば、いっさい稽古はしないで純粹に能の観客として能を鑑賞する人たちも多くいる。評論家や研究者、「能楽関係者」と言われるような人々もいる。観客の外側には、能について少しは知っているけれど見たことはないという人たちも、そもそも能と歌舞伎の区別もつかない人たちもいる。逆に「素人弟子」の中にも、稽古も熱心にするし各流の能も幅広くたくさん観るといふ人もいれば、稽古はするけれども能はほとんど観ない人、自分の先生の舞台しか観ない人、自分が習っている流儀以外は観ない人等々、様々なレベルの観客がいることになる。

もともとパトロンに頼る形で続いてきた能楽は、近代以降こういう素人弟子たちに支えられて独自の興行スタイルを確立してきた。昔は、能について考えるときの同心円はセミプロの外側の「素人弟子」（狭義の素人）で留めても良かったのだが、それはこの「狭義の素人」が観客としてパトロンとして支えてくれていたので、さらに外側の「縁無き衆生」にまで働きかける必要が無かったからだともいえる。

だが、素人弟子の減少、残った素人弟子の高齢化等々、近年そのスタイルが壊れ始めており、そのことに気づいた先見の明のある役者たちが、新しい社会にふさわしい興行形態を手探りし、素人弟子の外側に広がる新しい観客層を開拓しようとしているというのが現状である。こうした興行上の工夫については観世喜正氏や野村万蔵氏との対談、網本尚子氏の報告等を参照して頂ければと思う。

こうした動きはまた、若い層へのアプローチということで、教育とも深く

関わってくる。日本文学や芸能史などとは縁のない大学生たちへの授業に関する報告が竹内晶子氏によって為されているが、音楽の授業などで小中学生が能や狂言の謡や舞、囃子の実技などを体験する機会も増えている。とはいえ、小中学生は能楽だけでなく他の和楽器や邦楽も学ぶことになるので、すべての印象が混ざってしまう可能性もあり、こうした体験が将来の能楽愛好者や観客の拡大へと直接に結びつくかどうかは未知数であるが、たとえ他の邦楽と混ざった誤解であっても「楽しかった」という記憶が残ってくれるのは良いことだろう。児童・生徒だけでなく、授業で能や狂言を扱わねばならない教師たちへの講習なども試みられていることを書き添えておく。

若い世代へのアプローチということでは、もう1つ、インターネット社会ということも考えていく必要があるだろう。新聞も読まずテレビも観ないで情報はインターネットで得るという人が増え、大学も全部ネットを通して講義するようになるかもしれないというような時代に、我々はさしかかっている。昔なら、有名な評論家がテレビで言うことを多くの人が「そうか」と思って聞いていたのが、今ではすぐにネットで「炎上」して、「あいつはあんなことを言っているけれどもデタラメだ」「わかりもしないのに偉そうなことを言っている」などと批判されたりするのである（その批判自体が的外れなこともあるがそれはまた別の話として措いておく）。つい最近も YouTube に、アメリカの11歳の女の子がこの YouTube で見たダンスを6カ月間独学しただけで、もうプロのダンサーも顔負けぐらい上手になってしまったという映像が載っていた。

そのような時代に、能だけが昔ながらのスタイルを守っていくことは本当に可能なのだろうか。「守っていかなくてはいけないのだ」という立場は絶対にあるだろうと思う。中枢というのはそうやって伝統を死守していくものなのかもしれない。上記のダンスと同じことが能でもできるとは（山中自身が保守的ななのかもしれないが）、実は思えない。だが、今から10年前には今日のようなインターネット社会は想像できなかったことも事実であり、世界はたしかに急激に変わっている。素人の稽古などには伝統的な方法と並んで

ITを活用した方法なども採り入れられていく可能性はあるのかもしれない。

もう一つ、少し方法を変えれば、従来とはまったく違ったところに、能に興味・関心を持ってくれる新しい層がいるのかもしれないと考えさせられた事例を挙げてみたい。2009年、ニコニコ動画上に、「ボカロが伝統芸能に興味を持ったようです\_\_能楽仕舞「鶴亀」」という動画 (<http://www.nicovideo.jp/watch/sm7697325>) がアップされた。ボカロ（ボーカロイドとも）はヤマハが開発した音声合成技術を利用したキャラクターのことである。

動画を一見すれば判るように、扇は民謡を踊る時に使うような扇、しかもブーツを履いたまま舞っている。ニコニコ動画上ではリアルタイムでコメントが流れるので、そこには「せめて着物にしろよ」「ブーツは脱げ」等、誤りを指摘するコメントもあったが、それでも一時はこれが「踊ってみたランキング54位」の視聴数を得たという（作者のコメント）。現在、能楽堂の観客席には空席が目立ち、観客の高齢化も一目瞭然である。そういう時に、このボカロの動画ひとつで通常の公演やまたNHKの放送などでは届かない層に、いろいろ間違いはあるにしても、能というものの存在を知らしめることができるということである。これを受け入れるか、受け入れないか。判断は難しいが、「ホンモノの能」の外側に、昔なら結婚式で能には聞こえないような〈高砂〉の謡を謡う人たちの文化があったけれども、今はそのかわりにボカロに仕舞を舞わせて楽しむ人たちの文化がある、という風に考えることはできるかもしれない。

以上、現代の能楽をとりまくさまざまな状況や問題点、従来の価値観を少し変えて考えてみたいことなどを、はなはだ未整理かつ浅薄な形ではあるが、ピックアップして並べてみた。ここで提起した問題点にかかわる議論や一種の（現段階での）解決策、能役者の側からの立場表明などは、本書掲載の各論考に記されていることが多い。何度も繰り返していろいろな方向から取り上げられている話題もある。冒頭にも記したとおり本稿を「予告編」とし、詳しい議論は個々の報告や討議をお読み頂くようお願い申し上げます。